徳川四天王 榊原康政公ゆかり

館林まちあるきマップ

館林市教育委員会

徳川四天王 榊原康政

榊原康政は、徳川家康の側近として武勇と知略をもって功を立て、江戸幕府創設に貢献した武将として、酒井忠次・本多忠勝・井伊直政とともに徳川四天王の一人と称されています。

康政は、天文17年（1548）に榊原長政の次男として三河国上野（愛知県豊田市）に生まれました。幼名は亀、通称は小平太。永禄３年（1560）、桶狭間の戦いの後、今川家に人質となっていた松平元康（のちの徳川家康）が故郷の岡崎城（愛知県岡崎市）に帰還しました。この時、松平家の菩提寺・大樹寺で勉学に励んでいた康政は家康と出会い、小姓として家康に仕えるようになりました。家康19歳、康政13歳の時でした。

茶糸素懸威黒塗桶側五枚胴具足（康政初陣の甲冑）
上越市榊神社所蔵

永禄６年に三河一向一揆が起こり、康政は16歳で初陣。その功により家康から「康」の字を賜って「康政」と名乗るようになりました。

織田信長と同盟を結んだ家康は三河国平定後、今川家を滅ぼして遠江国を治めます。康政は家康の旗本先手役として、その後の姉川の戦い（対浅井・朝倉軍）、三方ヶ原の戦い（対武田軍）、長篠の戦い（対武田軍）などで活躍しました。しかし、天正10年（1582）の本能寺の変で信長が討たれると、状況は一変。この時、家康とともに上洛していた康政たちは、伊賀越えの危難を乗り越えて家康を守りました。

特に康政の武勇を広めたのは、天正12年の徳川軍と豊臣（羽柴）軍が戦った小牧・長久手の戦いでした。康政は信長没後の豊臣秀吉の不忠に対する檄文を書き、豊臣方の戦意を喪失させました。これに激怒した秀吉は、康政の首に懸賞金をかけるほどでしたが、和睦後に秀吉からその武勇を高く評価され、康政は知略に長けた武将として知られるようになりました。

榊原康政所用黒糸威二枚胴具足　東京国立博物館所蔵〈国指定重要文化財〉（Image：TNM Image Archives）

榊原康政略年譜

天文17年（1548）	１歳	榊原長政の次男として三河国上野（愛知県豊田市）に生まれる。通称は小平太。
永禄３年（1560）	13歳	桶狭間の戦いで今川義元が討たれる。岡崎（愛知県岡崎市）の大樹寺で初めて徳川家康に拝謁し、小姓となる。
永禄６年（1563）	16歳	三河一向一揆が起こる。上野城攻めで初陣し、その功により家康から「康」の字を賜り、康政と名乗る。
永禄７年（1564）	17歳	今川方の三河国吉田城攻略に際し、本多忠勝・鳥居元忠らとともに旗本の先鋒をつとめる。
永禄12年（1569）	22歳	今川方の遠江国久野城・掛川城を攻略。
元亀元年（1570）	23歳	姉川の戦いにおいて織田・徳川軍が浅井・朝倉軍に大勝。このとき先鋒をつとめる。
元亀３年（1572）	25歳	三方ヶ原の戦いで先鋒をつとめるが、徳川軍は武田軍に敗退。
天正３年（1575）	28歳	長篠の戦いに参戦し、奮戦して武田軍を破る。
天正６年（1578）	31歳	武田方の駿河国田中城を攻略し戦功をあげる。
天正８年（1580）	33歳	武田方の遠江国高天神城攻略で先鋒をつとめる。
天正10年（1582）	35歳	本能寺の変で織田信長没。このとき家康に従い伊賀越えの危難を乗り越える。
天正12年（1584）	37歳	小牧・長久手の戦いで豊臣秀吉の不忠義を記した檄文をしたため、敵の士気を削ぎ、武勇を高める。
天正14年（1586）	39歳	家康と秀吉が和睦。秀吉の妹朝日姫の輿入れの際に道中警護を行う。従五位下、式部大輔に叙任。
天正18年（1590）	43歳	小田原合戦後、家康が関東に入国。康政は館林10万石の城主となり、領内総検地や館林城の整備を行う。館林の茂林寺に禁制を出す。京都伏見の勤番をつとめる。
文禄元年（1592）	45歳	文禄の役（朝鮮出兵）の際に江戸にとどまり、徳川秀忠を警護する。以後、秀忠の補佐役となる。
文禄２年（1593）	46歳	館林城下町の惣構え普請に着手する（同４年完成）。
慶長５年（1600）	53歳	上杉景勝征討の先鋒をつとめる。その後、秀忠軍に従い中山道を西上する。徳川軍が関ヶ原の戦いに大勝する。
慶長８年（1603）	56歳	家康、征夷大将軍となり、江戸幕府を開く。家康に従い上洛する。在京料として近江国5000石を賜る。
慶長10年（1605）	58歳	徳川秀忠、２代将軍となる。
慶長11年（1606）	59歳	病を患い館林で没し、善導寺に葬られる。三男康勝が榊原家２代を継ぐ。

榊原氏は、南北朝時代の伊勢国守護職仁木氏の流れをくみ、康政から５代前の利長の代に伊勢国一志郡榊原村（三重県津市榊原町）に住し、榊原を名乗ったとされます。

榊原家家紋（源氏車紋）

ACCESS

お車でのアクセス

前橋IC
関越自動車道 約8km(約5分)
高崎JCT
北関東自動車道 約30km(約20分)
太田桐生IC
一般道 約15km(約30分)
館林市内

浦和IC
東北自動車道 約40km(約25分)
館林IC
館林ICから約3km(約10分)

宇都宮IC
東北自動車道 約60km(約50分)
館林IC
館林ICから約3km(約10分)

電車でのアクセス

浅草駅 → 東武伊勢崎線 特急で約60分 → 館林駅
伊勢崎駅 → 東武伊勢崎線 約60分 → 館林駅

▶東武伊勢崎線にて、
浅草駅から特急で約60分
伊勢崎駅から約60分

近世初代館林城主 榊原康政

天正18年（1590）８月、徳川家康は小田原北条氏滅亡後に関東に入国し、江戸城を拠点としました。家康は家臣たちを関東各地に配置し、榊原康政は館林10万石の城主となりました。このとき井伊直政は上野国箕輪（群馬県高崎市）12万石、本多忠勝は上総国大多喜（千葉県大多喜町）10万石が与えられました。当時の関東周辺には宇都宮氏・佐竹氏・伊達氏・上杉氏・里見氏など強大な武将が取り囲んでおり、館林城は康政が入城することで、江戸を守る北の軍事拠点となりました。

徳川十六将図
館林市立資料館所蔵
（上から２段目右側が榊原康政）

その領地は、現在の群馬県館林市・邑楽郡・太田市・桐生市（一部）、栃木県足利市（一部）に及び、領内の総検地や利根・渡良瀬川の治水事業を行うとともに、茂林寺・龍興寺など寺院へ禁制を発給し、寺領の保護につとめました。

館林城や城下町の整備も行い、文禄２年（1593）から町囲いの土塁と堀の普請を開始し、同４年10月に完成しました。この土木工事によって町をすべて土塁と堀で囲む「惣構え」とし、その規模は東西約１㎞、南北約1.2㎞、周囲約５㎞に及びました。さらに城下には商人ら多くの町人を住まわせるとともに、寺院を城下の縁辺に配置して町の守りを固めました。こうして館林の城下町は防衛拠点・経済の中心地となり、康政が現在の館林市街地の基礎を築いたといえます。

その後康政は徳川秀忠の補佐役となり、慶長５年（1600）の上杉景勝征討で秀忠軍に従いました。しかし、その直後の関ヶ原の戦いでは秀忠軍が遅参。康政は激怒した家康と秀忠の仲を取り持ち、以後、秀忠の康政への信任が厚くなったといわれます。また、康政は家康から水戸への加増・移封が打診されますが、それを辞退して館林にとどまりました。

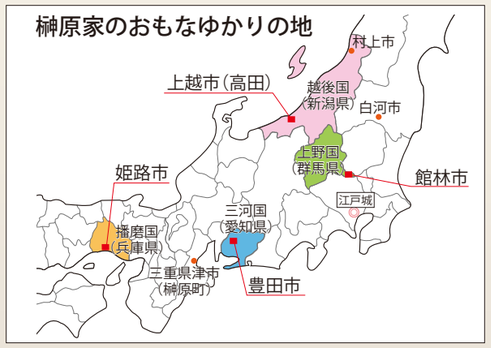
慶長８年に江戸幕府が開かれると、在京料として近江国（滋賀県）に5000石を加増され、老中相当職に就きますが、康政はその後幕政から身を引いたといわれています。

慶長11年（1606）５月14日、康政は病で59歳の生涯を閉じ、館林の善導寺に葬られました。

館林から姫路・高田へ

慶長11年（1606）に康政が亡くなると、榊原家は康政の三男康勝が17歳で２代を継ぎました。康勝は元和元年（1615）の大坂夏の陣に参陣しますが、その帰途26歳で亡くなりました。康勝には嗣子がいなかったことから、康政の外孫にあたる大須賀忠次が11歳で榊原家の養子となり３代を継ぎました。翌年、家康が死去し駿河の久能山に葬られ、さらに翌元和３年、家康の霊柩が日光へ改葬され、その際に館林の城下を通過し忠次が対応しました。寛永20年（1643）、忠次39歳の時に14万石で奥州の要衝である陸奥国白河（福島県白河市）へ転封となり、53年間治めた館林を離れました。さらに慶安２年（1649）には15万石で播磨国姫路（兵庫県姫路市）へ移り、４代将軍家綱の時に幕政に参与し武家諸法度の改正などにたずさわりました。忠次は和歌集も数多く残し、歌人としても知られています。

榊原家は５代政倫の時に越後国村上（新潟県村上市）へ移封。６代政邦の時に再び姫路城主となり、９代政永の時に越後国高田（新潟県上越市）へ移封しました。その後約130年間高田城主をつとめ、14代政敬の時に明治維新を迎えました。



榊原家歴代当主（江戸時代）

当主(藩主)名		生没年	城地	石　高
初代	康政	1548 ～ 1606年	館林	10万石
２代	康勝	1590 ～ 1615年	館林	10万石
３代	忠次	1605 ～ 1665年	館林・白河・姫路	10 ～ 15万石
４代	政房	1641 ～ 1667年	姫路	15万石
５代	政倫	1665 ～ 1683年	村上	15万石
６代	政邦	1675 ～ 1726年	村上・姫路	15万石
７代	政祐	1705 ～ 1732年	姫路	15万石
８代	政岑	1715 ～ 1743年	姫路	15万石
９代	政永	1736 ～ 1807年	高田	15万石
10代	政敦	1755 ～ 1819年	高田	15万石
11代	政令	1778 ～ 1861年	高田	15万石
12代	政養	1798 ～ 1846年	高田	15万石
13代	政恒	1813 ～ 1861年	高田	15万石
14代	政敬	1845 ～ 1927年	高田	15万石

榊原康政公ゆかり館林まちあるきマップ

編集・発行　館林市教育委員会　文化振興課
市史編さんセンター
〒374-0018　館林市城町２-３
TEL 0276-76-7651

〈表紙写真〉絹本着色榊原康政像　東京国立博物館所蔵〈国指定重要文化財〉
（Image：TNM Image Archives）

〈協　力〉榊原政信氏　(公財)旧高田藩和親会　上越市立歴史博物館
西尾市教育委員会　館林市立資料館
榊神社　善導寺　善長寺　遍照寺　茂林寺　龍興寺

館林市全域マップ

館林城の歴史

館林城は戦国時代に赤井氏によって築かれ、古河公方足利成氏に味方したことから、文明３年（1471）５月に関東管領上杉軍に攻められました。

その後、永禄５年（1562）に越後の上杉謙信の侵攻によって赤井氏は追放され、足利城主長尾景長が館林城主となり、その後長尾顕長が館林城主となりました。さらに、天正13年（1585）、小田原北条氏の侵攻により長尾氏は退却、館林城は北条氏の管轄となりました。

そして、天正18年（1590）、北条氏の滅亡によって徳川家康が関東に入国。榊原康政が館林10万石の城主となりました。江戸幕府開設後は、館林城は榊原家をはじめ、大給松平家・徳川家（のちの５代将軍徳川綱吉）・越智松平家・太田家・井上家・秋元家の７家の親藩・譜代大名の居城となり、秋元家の時に明治維新を迎えました。

大給松平氏時代の館林城絵図　西尾市教育委員会所蔵

江戸時代の館林城主（藩主）

藩主名		在任期間
榊原	康政	1590～1606年
	康勝	1606～1615年
	忠次	1615～1643年
松平（大給）	乗寿	1644～1654年
	乗久	1654～1661年
徳川	綱吉	1661～1680年
	徳松	1680～1683年
（廃城　1683～1707年）		
松平（越智）	清武	1707～1724年
	武雅	1724～1728年
太田	資晴	1728～1734年
	資俊	1740～1746年
松平（越智）	武元	1746～1779年
	武寛	1779～1784年
	斉厚	1784～1836年
井上	正春	1836～1845年
秋元	志朝	1845～1864年
	礼朝	1864～1869年

❶ 善導寺（館林市楠町）

浄土宗の寺院で、山号は終南山見松院。城下町南西部の旧谷越町（現本町二丁目）にありましたが、平成２年（1990）、館林駅前広場整備により現在地の楠町に移転しました。和銅元年（708）に僧行基が東国遍歴の途中に外加法師付近に一庵を建てたのがはじまりで、建久４年（1193）に頓阿見性法師が草庵を修復し、建治２年（1276）に良暁上人が再興して伽藍を建立しました。天正18年（1590）に館林城主となった榊原康政は、善導寺に来住していた高僧幡随意上人に帰依し、善導寺を城下の谷越町に移転して伽藍の再興を行い、榊原家の菩提寺としました。境内には榊原康政の墓（群馬県指定史跡）のほか、館林城主松平（大給）乗寿の墓があります。

元和元年（1615）に浄土宗僧侶の学問所「関東十八檀林」の一つとなり、明治２年（1869）には明治天皇の勅願所となりました。

善導寺の山門（館林市楠町）

群馬県指定史跡「榊原康政の墓」

善導寺本堂の西にあり、石柵に囲まれた５基の墓石が並びます。正面に榊原康政の墓（宝篋印塔・高さ5.46m）、向かって右に遠江国横須賀城主大須賀忠政（康政の長男）の墓（五輪塔）、２代榊原康勝（康政の三男）の墓（五輪塔）、花房氏（康勝の母）の墓（宝篋印塔・高さ4.36m）が並びます。また、康政の墓の左脇には殉死した家臣南直道の墓（宝篋印塔）があります。

館林駅前広場整備による善導寺移転に伴い、館林市教育委員会で昭和59年（1984）から昭和61年にかけて墓所の調査と移転・復元工事を行いました。発掘調査では、康政・康勝・花房氏の墓から遺骨が発見され、そのうち康勝の遺骨は高さ10㎝の伊万里焼の小壺に納められていました。墓所のあった場所（現在の館林駅東口ロータリー）には「榊原康政の墓跡」の表示板が建てられています。

榊原康政の墓

２代康勝の墓石内から出土した伊万里小壺

❷ 善長寺（館林市当郷町）

曹洞宗の寺院で、山号は巨法山。大永３年（1523）、赤井家範が兄信家の菩提を弔うため城沼北岸の観音堂東に一堂を開いたのがはじまりとされます。大雲惟俊和尚の開山。境内には館林市指定史跡「榊原忠次の母祥室院殿の墓」（高さ4.89mの宝篋印塔）があります。祥室院殿は下総国関宿城主松平康元の娘で、榊原康政の長男大須賀忠政に嫁いで忠次を生みました。忠次は元和元年（1615）に榊原家２代康勝が急逝したことから、榊原家３代を継いで館林城主となりました。祥室院殿は忠政の死後、伊勢国長島藩主菅沼定芳に再嫁しましたが、元和９年（1623）に没し、忠次が善長寺に墓石を建立しました。墓前に２基の石燈籠があり、その一つに寛永10年（1633）の銘があります。平成９年（1997）に墓石の解体修理と石塀の改修工事を行いました。

また、境内には城沼対岸にあるつつじが岡の伝説にまつわる「お辻・松女の供養塔」もあります。

榊原忠次の母祥室院殿の墓〈館林市指定史跡〉

❸ 遍照寺（館林市緑町一丁目）

真言宗の寺院で、山号は高鑰山。建久９年（1198）に新田義重が先祖供養のために矢島郷（現在の明和町）に建立したと伝えられます。天正18年（1590）に榊原康政が館林城主となると、遍照寺十三世宥円和尚の高徳を慕って寺領を与え、館林城に近い現在地に移し、榊原家の祈願所としました。３代忠次が寄進した康政の守護仏の十一面観音のほか、榊原家ゆかりの品々が寄進されています。本堂・山門の屋根には榊原家の家紋源氏車紋が施されています。

遍照寺本堂

❹ つつじが岡公園（館林市花山町）

城沼の南岸にある約１万株のツツジが咲き誇る公園で、「躑躅ヶ岡」として国の名勝に指定されています。江戸時代は「躑躅ヶ崎」と呼ばれ、歴代の館林城主が保護しました。その起源は榊原氏の城主時代にさかのぼり、園内の「躑躅岡公園記」碑には３代忠次が新田郡花見山からツツジを移植したことが記されています。また、城主が寵愛する「お辻」が城沼に身を投げ、それを嘆き悲しんだ村人がツツジを植えたという伝説もあり、対岸の善長寺には「お辻・松女の供養塔」があります。

つつじが岡公園と城沼

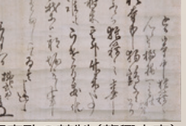
❺ 館林城跡（館林市城町）〈館林市指定史跡〉

館林城は狐の尾の導きによって縄張りされたという伝説から、「尾曳城」とも呼ばれています。城沼を要害とした平城で、城の北側には家臣たちの侍屋敷が並び、西側には大手門を境に町人たちの城下町が広がっています。町には商人や職人が住み、多くの寺社が配置されて経済・文化の中心になりました。廃藩置県後の明治７年（1874）に館林城は焼失し、建物はほとんど取り壊されました。現在では三の丸と本丸に土塁の一部が残され、三の丸には昭和58年（1983）復元の土橋門があります。

館林城土橋門

❻ 城下町惣構えの土塁（館林市台宿町・朝日町ほか）

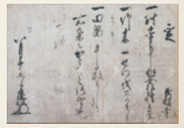
榊原康政は、文禄２年（1593）から町囲いの土塁と堀の普請を開始し、城下町をすべて土塁と堀で囲む「惣構え」としました。この普請には周辺の村人たちが動員され、文禄４年に完成したと伝わります（「館林記」）。現在、城下町の北辺にあたる第一中学校（台宿町）や朝日町にその土塁の一部が残されています。また、城下町の南辺（製粉ミュージアム敷地内）には堀跡の一部が残されています。



第一中学校に残る城下町惣構えの土塁と堀跡

❼ 茂林寺（館林市堀工町）

曹洞宗の寺院で、山号は青龍山。応永33年（1426）に美濃国の大林正通が開山し、応仁２年（1468）に青柳城主赤井正光が開基したと伝えられます。貉が化けていた守鶴和尚が、汲んでも湯が尽きない茶釜をもたらしたという分福茶釜伝説で広く知られています。大永２年（1522）に後柏原天皇の勅願寺となりました。天正18年（1590）８月19日に榊原康政から寺中での乱暴狼藉を禁止した禁制（定）が出され、寛永12年（1635）には３代榊原忠次からも同様の禁制が出されています。



榊原康政の禁制（定）（茂林寺宛）

❽ 龍興寺（館林市高根町）

曹洞宗の寺院で、山号は妙高山。文永11年（1274）に高根院賢叟休心大居士が開基し、高根寺と称したと伝わります。天正12年（1584）・13年に北条氏邦（武蔵国鉢形城主）から、寺領の乱暴狼藉を禁止した禁制２通（高根寺宛・高根之郷宛）が出されています。また、館林城主榊原康政の禁制（龍興寺宛）も出されています（いずれも館林市指定重要文化財）。境内には徳川家康より康政の家臣として遣わされた三家老の一人・原田権左衛門種政の五輪塔があります。

榊原康政の禁制（龍興寺宛）